

中古治創家有血類七氣之稱、以產亦屬血併治之、吉益中條二氏其最顯者也、吉益有半笑齋、中條有帶刀而其術不詳、今世女醫穩婆率稱中條流、或有支派存者、然多不過冒其名實非有正傳、蓋治產之術、至賀川玄悅蛭田克明而備矣、

〔退閑雜記十〕蛭田玄仙となんいふものは、棚倉塙の産なり、産醫と稱す、予定○松平が領へもきたりければ、人して尋させけるが、言葉もつたなく、才もなく、學もなければ、かの産論などもてたゞくに、こたへつまびらかならず、たゞ臨月にあたれば、いつにても、産させぬるも、又は月をのばしぬる事も、子疳の症などを愈しぬるも、みなし覺たり、たゞ語りては、いひ盡しがたし、いまにても妊婦あらば、玄てこそみすべしとのみいふ、予き、て、かの輪人の輪けづるなり、喋々利口にまされる事遠かるべし、いかでいやしむべきとはいひひける、又よくその事わきまへたるもののが、き、けるに、これはことに感じたり、かの産論に不及は、靜體の術のみにして、その餘は大にかのものひらきし事多し、産させぬるは、産門より胞衣をきるを破水の術とす、忽ち産するなり、臨產はらいたみ、腰いたむは、自ら胞衣きりたさの餘りに、體をさまぐにするのみなり、こなたより胞衣をさけば、破水して忽產するに難なし、また血暈の症などは、いとたやすき事にいふなり、小腹のわきより動ありて、その動登れば、血暈す、一指もてその動をおさゆれば、血暈なし、されば産して横臥する事などの論にもいたらず、一指もて血暈をとどむる事なれば、すべて深く論せず、太古の風ある醫なり、かの口いふ事あたはざれども、その不可を教るといひためるは、千言萬言費したるよりも遙にまさりぬるなり、いかでかうやうの醫をあなどるべき、

〔子玄子產論序〕我先君東洋先生、痛吾技之頽壞、排闢世醫、以立古醫道矣。余東門山脇也、少小與聞之尙矣、既而聞城南一貫街賀川子玄翁者、善艱產之術、然其事奇險幾乎、詖離焉亡、幾先君逝矣、余小子、嬪在疚、益恐斯道之荒廢、○中略及此時、翁之名益顯、遂介以得見、翁爲人忠實任氣、初以鍼術爲業、大見